山ろく清談

NPO法人「がん哲学外来」理事長　樋野（ひの） 興夫（おきお）さん

患者の考え深める言葉

順天堂大医学部病理・腫瘍学教授。日本家族性腫瘍学会理事長。日本癌（がん）学会奨励賞などを受賞。著書に「がん哲学外来の話」など。島根県出身、57歳。佐久市のクアハウス佐久で。

「がん哲学とは、どんなものですか」とよく聞かれます。端的に言うと、がんを生物学と人間学の両方の側面から考えることです。がん細胞には、自分の形に固執せず与えられた環境に合わせて自分を変化させる仕組みがあります。こうしたがん細胞の性質から、人間の生き方を見いだし、社会のあるべき姿も学ぼうというのです。

日本人の2人に1人はがんになるといわれており、現在治療をしている人は約150万人います。ただ、医師も看護師も忙しくて、患者さんと時間をかけて話し合えない。

そうした状況を変えようと、2008年に3カ月間、患者さんとじっくり対話する初の「がん哲学外来」を順天堂大付属順天堂医院に開きました。生きることの根源的な意味を考えようとする患者さんと、がんの発生と成長に哲学的な意味を見いだそうとする医師やカウンセラーが向き合い、対話をする場です。

予約はすぐに埋まり、人々から求められているということを肌で感じました。そこで、09年にNPO法人を設立し、普及に取り組んでいます。今では佐久市を含め全国6カ所で定期的に開いているほか、不定期の開設もあります。

私の専門は病理学です。病理学者は顕微鏡でがん細胞を見て、頭の中でDNAまで構築します。がん哲学外来ではどうするかという、患者さんを見て、その「悩み」を考えながら対話します。悲しい顔の人も怒った顔の人もいますが、その原因を引き出せば患者さんは楽になる。

加えて、患者が考えを深める時に役立つ「種」になる言葉を渡しています。言葉が心にヒットすると悲しげな人も背筋がすっと伸びる。信州の生んだ偉人に、世界初の人工がんをつくった山極勝三郎（1863～1930）がいます。彼は「目下の急務は忍耐あるのみ」という言葉を残しました。そうした「暗記できる」言葉を患者さんの悩みに応じて伝えています。

がんはあると困るけれど仕方がない。だからこそ、がんと共存しつつ天寿を全うすることが大切なのです。

東日本大震災や福島第1原発事故の後、放射線の影響に関心が高まっています。環境によって引き起こされるがんを長期的に研究する「国際環境発がん研究センター」といった機関が必要と強く思うようになりました。「環境発がん」について、国際的に発信することは日本の大事な使命ではないでしょうか。

私が敬愛する新渡戸稲造は国際連盟の事務次長時代、後に国連教育科学文化機関（ユネスコ）となる「知的協力委員会」を立ち上げました。哲学者のベルグソンや物理学者のアインシュタインなど、そうそうたる人物による学問分野を超えた組織でした。21世紀の知的協力委員会ともいうべき組織を日本主導で立ち上げ、環境発がん研究センターを運営する―。こうした取り組みが国益を超えた国際貢献になると思います。